

## レクイエム

ウンベルト・デياس・カサヌエバ

三角 明子 訳

マヌエラ・カサヌエバ||デ||ディアス（一八八七〜一九四四）を悼んで

「息子らは立って彼女を幸いな人と呼び、夫は彼女をたたえて言う」

箴言三十一章二十八節

### I

凍える哨兵のように問う、時のはざまに隠れてわたしを見つめているのは誰だ？

なにかが震えながら通りすぎ、なにかが夜の枝葉を震わせる、さまよえる夢がわたしの五感を研ぎ、死すべき運命の耳は野の犬の呻きを聴く。

香をたきしめた木を押す男、疲れはて白髪をまき散らす男を見ろ、皮膚癩患者のようだろう？

だが長い太綱で猛烈に引かれるわたしの心臓のほか、誰もこたえるものはない。

誰もいない。成長しつづけあまたの扉を覆う苔のほかは。

私心のない魂たちはあらたな住処を求めて歩きまわっているのだろうか。

だが目に見える者はいない、頻繁に人間に入りこみ仕上げ印を押す夜以外は。

おお、ねらい定められた獣さながらの予兆！ 見ることを強いる恐るべき煩悶。

盲人のときとおなじく、奥深くにあるものが隔たったものを照らす、

ちかいものと隔たったものが憤怒にまみれて合一するさまを。

あちら、はるか遠く、貪欲な山の国で、お下げ髪の泣き女たちが高い

塔で手紙を書くさまが見える、

わたしには馴染みで優しい女たちは言っているようだ、

「縁起の悪い血をませあわせましょう」と。

小さな花束はどこへと落ちるのだろうか？ なぜ死者たちの身を飾って

いくのか？

寝すごした者がいるかのように鐘をかき鳴らすのは誰だ？

ここでわたしはこんなにもひとり、絡みあう蛇のように両手を強烈に

より合わせる、すべてがわたしのまわりで大きくなっていく。

それとも逃げるべきなのか？ 黒い水のうえを夢のように進む小艇に

乗るべきなのか？ いや、逃げるときではない、しるしを読む

まなければ。

剣を汚した肉づきのいい男がうろつくさまはどうだ。出てきたのは恐

るべき命令を遂行するためだ。

突然わたしは聖夜に響く叫びを聴く、遠く離れた我が家から、土台を

揺さぶるかのような

目も眩む光がくる、傷をおった雌鹿が脚をひきずっている、その胸は

月のように輝き乳はゆるやかに世界を満たして行く。

## II

ああ、なぜ涙が吹きでるのかわかった！ なぜ犬は口をつぐまず大地

の幹を掻くのか、なぜ蜂の群がわたしを取り囲むのか、  
すべてが絶壁のように唸りをあげるのか

そして侘しいわたしの存在が枝のように震えるのか。

今ならば眠る女がつぶさに見える。ああ、こんなにも青ざめ、その顔

は引き裂かれた雲のようだ。ああ母さん、あそこに横たわり、

刺青を入られているのはあなたの手、むさぼられているの

はあなたのキスだ。

ああ母さん！ そういうことか？ そんなにも深く眠ったから夜の向

こう側で目覚めたというのか、目には映らない飢えた泉で？

わたしを傷つける、天の風よ！ 断食で猫鞭で黒い木のするどい枝先

で。

失われた年月の記憶よわたしを傷つける、粘土質の一画よ、神々のく

びきよ。

多くの手を渡ってきたロザリオが、生まれる日の柱をまるく取り巻く。

そして君主は向こう岸で血を止めている。

命を奪うような寒気のなかで、なにもかもまるで見捨てられたかのよ

うだ。

ことによると泣きながらわたしから出て行く子がかれらには見えない

のか、外套を火に包まれ走り回る男の子が？

わたしは、そうそのままのわたしは、まったく成長などせずこの大地

に幽閉されあれほどの年月たえまなく改悛し、ほかのどの息

子とも変わらず深淵のうえに頭髮で吊るされている、

だがあなただけの息子だ、ああ眠れるひとよ、あなたの長衣は不幸に

よって掲げられ天に届き、浮き、わたしのあわれな頭上で畳まれていく！

### III

宿命に打ち碎かれたならひとは黙れるのか？ おのれの塵を反芻する

ことを誇れるのか？ 陰気な大水の流れのような沈黙で満足できるのか？

あの無音の讃歌は二層の防具を身につけた生者たちに属するのか？  
唾が石の下を充滿しているからことばはわたしたちをそこへと導くこ

とはできないが

(それは隊商が投げ捨てる桃の芯だ)、

わたしは歌わねばならない、とても悲しいから、恐れているから、そして黙した時間が魂を揺らすから。

生まれたての我が子を影が覆う場所に顔をふたたび向ける。

唇を重ね合わせる暗色の石を手でさぐる、涙に濡れるとそれはわずかに

に明るみ、刻まれた音節がいまだに残っているかのように震える。

あなたはほかの誰でもないあなた、わたしを全方向から見つめている

このあなたは、石の階段が出現したときにはわたしを間近で見つめることができなかった。

山を割る天使が遠くに見えた、

あなたの汗の冠が夜を転がり落ちるのを見た、

氷に満たされたあなたの膝上も。

いまわたしたちは対岸にいる、わたしはあなたを呼ぶ、あなたがあた

かも天に照らされて現れるかのように木々が揺れる。

母さん、海のまんなかでたったひとり、なにをしているのですか？

だがこたえるのは空虚な青銅のようなわたし自身の内臓だけだ。わた

しと約束してなかったですか？ 血縁のひとびとがさまよ

い、楽になったからだがいつまでもいる谷にわたしを入れて

はくれないのでしょうか？

わたしは敷居を越えることができないのでしょね、死者は冠を投げ

あわないしわたしには強欲な骨を理解することは許されてい

ないからね？

あなたはただ眠っているだけ、

愛の永続する光を浴びて

そしてあなたの焼けつくような意志はこの世のもののごとのあいだをさ

まよう、それはまるで、沈黙のなかであなたを呼ぶわたしを

連れ去る、成長する不眠の合唱隊のように。

### IV

木に火傷あとがある場所が世界にはある、世界のどこかに部屋がある、

わたしの両手はそこに囚われわたしの日々がそこを満たす、

その場で消費されたものをわたしは記述することになってお

りなにひとつ落としてはならない、

というのもひとは強大な羊飼いたちに恭順するようになってきているからだ。わたしにはわかつていて、わからないなんてことがあるだろうか？

あそこに耳鳴りが閉じこもっていること、屋根のうえで百合がずっと泣いていること、まわりにはそして嵐の空の飛翔があることが。

旅の終わりが毎回そうなるように、わたしはあそこに到着するはずだ、贈り物は湿った帯で縛られている。

母さん、どこにいますか？

(戻ってくるまで待ってる、と言ってくれましたね)

美しい鳥たちが姻戚を結んだ純粹な檻はどこにある？

新床のやさしさの滴りはどこに？ 子ライオンたちの雌ライオンは？

いまは内在するだけのものをわたしは無為に探すことになるだろう、

親類縁者たちはよるべない人のようにつぶやくことだろう

姉妹たちは哀悼のため弱々しい表情で、死の根が狂おしく育ったしと

ねをわたしに見せることだろう。

おお、そんなものをわたしに見せてくれるな姉妹たちよ、おお翼に擲

たれ傷ついた高貴な父よ、ふるいにかけてた砂を足跡を見せて

くれるな！

だがわたしには繰り返させてくれ、「母さん、どこにいるの？」と、

血で湿ったハーブが響きだすまでいらだつのも放っておいて

くれ

燃えさかる夜の川が流れ、たくさんの矢にうたれ水に漬かった女がと

どまることなくわたし自身の家を通りすぎてゆくまで

あのおそろしい心の傷がわたしのなかで膨れあがるまで。

## V

ああ、あそこでだけ、聖杯が飲み干された音のない部屋

汗にまみれた外装が壊れ、ときの盲の側面が取り戻され

そして面目が月のきらめきに溶けこんだ場所

あの場所ですらよくわたしは気づくことだろう。

黒い招待客たちのため一列に並べられた椅子が、

腕を広げたメッセンジャーたちをなだめる供物がここからようやく見

える、

乾いた鞭と傾く銀の扉の音が聞こえる。

他ならぬあそこがかつて二十人の男が妻とともに長卓につき、干渉し

あわず聖体を拝領した。

いまでもオカリナのように響くワインが聞こえるようだ、旧交の歌も

そして白い結婚もあまいキスがぶどう畑を満たしていくのも。

そして神父がかけらの笑みを浮かべメンドリを食する姿も。

あそこでは素朴なひとたちの夢が恐れを知らずに芽吹いていた

それはあなた自身が呪文だったから

そしてあなたの魂を通して

わたしたちがこの世の絆を結んでいたから。

憂鬱なわたしという存在は失われた善に焦がれる。ああお母さん、

わたしはあなたを愛するすべを知らなかった！

すべてが哀歌に曇り記憶に蘇る  
すべてが戻り空虚へと転がり  
そして暗い恐れが鋤の跡のように刻まれて  
わたしは剥奪した品に哀歌を注ぎこむ、  
砂漠を洗うことになる幼子の哀歌を。

VI

跪くこのわたし、大男は、まるで今になってようやくあなたをみいだ

したかのようだが、あなたは誰よりも鮮やかに見えるうえ

儂さとはこのうえなく縁がない、誰よりも苦しみイバラの冠を頂いて

も笑っていたひと

わたしを隠れ場所から日中の天幕へと送り出したひと、かつて井戸の

へりで押しつぶされ神々に捕らえられたままだった

わたしにはじまりを与え、今は最後のものとなったひと。

ああ、あなたは時の中心に！

それとも決して辿りつくことのないあのさまよいびとにすぎないのだ

ろうか、あなたは血脈を漂白するひと、秘密のサークルにあ

る錘のように掲げられた体からつねにわたしたちのため命を

紡いでいるひとではないのか？

跪いてわたしは通りすぎる夜に耳を澄ます、世界を通りすぎていく泥

でできた桁外れの夜

このあまりにも遠い、雪が夢の凍りついた哀歌さながらのこの国で。

至る所に、鼓動をうつ暗色の産着と母のくしゃくしゃの翼。  
そして孤独な裸女がわたしを見つめ自分のくびきを壊す、  
彼女の目がわたしの顔を通りすぎると、

わたしの感覚のうちで朝咲きの薔薇が一輪開く。

美しい乙女姿のあなたの肖像が消えるはずがないだろう？

より穏やかに立ちあらわれ静寂のなか鼓動し、あなたのやさしい手紙

のあいだから透明に立ちあらわれる肖像が。

ことによるとあなたはつねに同じ乙女、あの生気にあふれ今ここに

る乙女、不眠のサンダル、わたしたちが一日じゅう輝かせて

いた穂だったのではないか？

執拗に蜂の巣を引き裂き

震える塔を舞踏で満たしたあの愛人ではなかったか？

手には聖なる杯、

胸に邸宅、

額には神殿の白い羽。

これほど清くこれほどに世俗的で。ああ天の声、はっきりとした静脈、

抱擁のように持ってこられた矢束のような胸！

天蓋のしたを行くようにあなたは歩いてきた、まるで意識もせず、あ

なたは仕えるためにやって来たのだ休むためでなく、

天使たちが大声をあげていた種床のように高みにのぼるために、

あなたが夜を徹していることは家じゅうみな感じていた、あなたの

翼はやわらかく導いていた、

あなたの心臓が狩り取った暗闇は無数、あなたを消耗させる焚き火は

大きかった。

## VII

あなたの物惜しめない魂から飲んだ乳をいま誰が返してくれることになっ  
ているのだろうか？ あなたがこれから手に入れるものは  
どうやって分け与えることになっているのだ、もしそういう  
ならわしだったならば？

あなたがヴェールを引き裂いても、影の位置から不思議な力をわたし  
たちに振る舞うことができないというのなら、騒乱があなた  
の邪魔をするなら、迷宮には扉がないのなら、

わたしたちの空っぽの皿を前にしたあなたの苦悶はどんなものになる  
だろう？

あそこ、きらびやかなあの空間で、神々が食べるものはあなたにはす  
こしよそよそしく思えることだろう、つねに整っているテー  
ブルで大皿からスプーンをまた取りあげるのと同じように大  
地を通して手を伸ばせないのなら。

あなたが不安で一杯なことはわかっている、その霧に煙る小道を踏み  
ながら心乱れていることも、体から出てくる青銅の報告書を  
どうしたらいいかわからないことも、

仕事や幼子への愛着のほうが好きなことも、その子たちを通してえら  
れるほんのわずかな永遠がなによりもあなたを喜ばせること  
も、

あなたの愛は大地の裂け目の渴きを満たすことを望むだろうことも。  
わたしはあなたをよく知っている、おお、母さん、あなたが金の指輪  
を消し忘れたのも知っている

指のあいだで時計があなたに囁き続けていることも  
しるしでいっぱい縫い目が足に絡みついていることも

日が顔をのぞかせていた陶土を乾かし続けていることも

胸に沈んでいった鳥の声を聞き続けていることも赤と白に色づかせた  
花に水やりしつづけていることも水に漬かってかじかんんだあ  
なたののんびりした手を暖める火鉢が足りないことも。

## VIII

おお無限の母、はかりしれない大地、契約に応える命よ！

あなたが死んだらわたしも死ぬ、嵐のなかの船のようにあなたのなか  
で道はずれる

あなたの灰を岩山に投げつける男はこのわたしをも粉々に砕いている  
のだ。

だがあなたは死んでも、同時にわたしを通して生き続けてもいく、山  
に千一回登っても霜を恐れない果実のように

あなたは消費されて消えまた救い出されてふたたび現れるそしてあな  
たの盛衰のなかに突然見える、あなたがわたしの娘の目を通っ

ていく姿は  
きらめく帯のようだ

そして娘の表情を和らげ、生まれいずる鏡を吹きつける。

おお鷲にまたがり下降する娘、手にはザクロを持ち永遠に成熟し

祝祭のためよりあわせる金糸をたずさえている！

あなたは生と死を大胆にも混ぜあわせ、わたしは幻のはざまでかくも

奇妙な類似性を讃える。

ああ母さん、あなたはこれおそろしい混沌のさなかにもこんなに揺る

ぎなくそびえたち、わたしを落ち着かせることを希求してい

る！

おお母なる妻、わが娘、同じたいまつの中の炎のように、時の継承のなか

での生あたたかい鉄の環のように

世代が動かす同じ暗い環から解放され、全員であり同時にただひとり

のひとは螺旋のうちで混じりあい、

あそこ、死をはらむ深い夢のなかでわたしの魂を愛容させる。

乳を飲みにやってくる蛇を退けよ、とあなたがたにわたしは言う、

母は一気に放り出された群れのちびたちを救うだろう！

世界に入るか出るかするひとはみな、ゆたかな水でできたゆりかごに

沈み、

すべり、血の流れが火花を散らすとまたすべる、

そして母たちは目で覆いつくされた手をかれにさしのべる。

## IX

不毛の王国からあなたに目印をつけた女は麻でくるまれその種子はこ

ぼれ落ち続けていた、というのもあちらにはそれこそ昇って  
は下りる無数の無数の母たちがいたから

ゆったりしたドレスは花粉にまみれている、母たちの階段、その最初

の区間は最後とおなじように闇を調節する。

(ひょっとして神々もまた母でありわたしたちを叩く杖は

そのはらわたで育つのか?)

あそこで耳輪をつけ夢のなかで知らせをもたらす老女があなたを待ち

受けていた、彼女は瀕死の兵士に手紙を書く女、碗をびんと

さしだす場末の哀れな女、

死んだ哀れな子を爪でささえる女、

根っこから乾燥させたウチワサボテン。

女たちはみな目印をつける、そうすることによってだけ立ち直れると

考えている。雌ライオンが大地の紐を離そうとはしないよう

に

恒星のあいだで放心した彼女たちは死の力を理解していない

泥の家への訪問を取り決め、あの古いトランプットでお触れを出そう

とつとめる。

ほんとうに、わたしたちは一瞬ごとに彼女たちに孕まれていると感じ

ないか?

わたしたちはともに眠り、生まれそして離れていく、

夜が来てもう一度あの胸に戻りたいと願う

そうして不死のひとびとはわたしたちの臨終を用意する。

これについてあなたはもうすこしは知っているはずだ、人間というも



のは洞察力があるわけではないし

ひょっとして驚異を理解できるのは幼い子たちだけかもしれない。

そしてわたしはあなたが湿った廊下、灰の川床を歩いているのを知っ

ている、

たいまつに照らされ

車輪に手を乗せている、

あそこ、粉引き小屋の番人が話すことを許さない場所

そしてあなたが目を開いたまま夢見ているかのような場所。

とつぜんわたしは不思議に力づけられる、もしかしてそのときあなた

は蛇の頭部をおしつぶし月のやわらかい材木を踏み

憤怒の聖油に聖別されて、兩岸のあいだでしなる橋を渡っていたのだ

ろうか

つねに幼な子を腕に抱え、つねに永遠に、つねにその子に血を渡して

やりながら、つねに燃え盛るしるし、そして大いに回り道を

しながら

その子を死者たちから救い出そうとしているのか？

## X

もしもあなたがやさしく付き添われていると、家の氏神があなたに古

い出来事を語るのだと

確かめることができるならば、

あのよそ者たちの洪面はあなたを怖じ気づかせていないとあなたは好

意的な雑踏に付き添われて飛んでいるということをし

息子であるわたしはかくも孤独に死へと入っていく、雲がひとつ、

われわれを包みひとりひとりを引き離し

乾いた一本の丸太を流れが運び去っていく。

だが母たち、ああ母たちは！ 強いられて残り愛の結び目に締められ

て戻るのではないかと？ わたしたちの臨終につきそわず、の

ちに迎えに出てくるのだろうか？

彼女たちこそが大地の永続する儀式を完遂するのではないのか？

ならば男はどうやって秘密を調べあげ、限界を測ることができるとい

うのだ、もし

母たちがかれに乳をやらないというのならば。

ああ、母よ！ 子どもがあなたに哀願しています、今どこにいますか？

どこで夜を明かし、どこに空の巣をかけ、どうやってわたし

に聖なる教えをくださるのですか？

わたしたちは続き部屋を動いているのではないかと思うことがある、

あなたは砂のうえを歩いているかのようで、わたしたちは捕

らわれ人のようにもがき、壁のなかで力づくでわかりあう。

隠れ場所はどこにある、そして見守る雷は？ 柵に囲われた者たちを

解き放つのは誰だ？ あなたを覆う粗布、それを理解するの

は誰だ？

その子はあなたに哀願する、ほとんど使ったことのない手で熾火をか

き混ぜる、かれの椅子は深い峡谷のそばに位置する。

その子はあなたに哀願する、でもあなたはあのときのようには来ない、



あゝのときは輝く尼僧のように壁から出てきてた、手には震えるカップを持ち

わたしの魂をおおいなる恐れから解き放ってくれていた。

## XI

あなたはわたしの魂を大地のうえに新たに据えていた、それがあなたの使命だったから

あなたの金のランプは狼が近づきすぎるのを阻んでいた

井戸としるして満たされた夜で、あなたの乳の激流は唯一の道だった。

ああ！ あなたの命令はわたしをアトリウムにおき地上での目的を静めることでしたね

辛抱強くあなたは待っていた、あの少年が二本足で歩いてひとつひとつ

つづきのものを大きなタンバリンのように揺するのを

そして驚の雛鳥にまじり、あるいは泡まみれの馬にしがみつき、あら

れでいっぱい投げ石機を手に、森を抜けてゆき町を目覚めさせ

るのを。

かれは時と理解され、似た者たちのあいだにわけあたえられて、祈り

と聖歌に満ちている。

あなたがわたしにくれた基礎知識が鍵だった、

わたしに教えてくれた一歩一歩がしるしだった、

開いてくれたわたしの目は、ちいさな塔。

わたしの信仰はいまどこにある？ 夢よりも深遠ないのちは？ 推測

された真実は？ 地面から掲げられた理解は？

わたし自身が発見した基礎知識は壁を握るもぐらのように跳ねて行くだがすべては無駄、というのも目は縫い合わせられているから、足どりが壁にゆきあつたから

わたしにはなにも見えない、あなたが見ることを教えてくれたものさ

えも、

混乱を呼ぶことなく命名できるものがひとつもない

そしてなにひとつ完成させることができない、純粋な習慣さえも。

ああ母さん！ ここ、わたしの奥底で叫びを寄せいまだにわたしを導

こうとしている、あなたの手はわたしの感覚のあいだで震え、

脆弱な柱のあいだの盲女のようにして

いまあなたがわたしの感覚のあいだに見る

そしてわたしにはあらたにあの生あたたかい根、つねにあらたな愛の

教え、人生を描いた石版を手渡す。

ああ母さん、ここで、夜あなたはわたしに叫ぶ、あなたのまじりけの

ないドレスは渦巻き、まるで丘のように隆起する、

まるで森の奥深くまでを焼き尽くす火のようだ

そこで大地の賜物がわたしを待ちつつづけている。

## XII

あなたはここ、わたしの前にいる。自分を哀れむがいい、もうわたしに聞かせようと叫ぶ必要はないのだから。わたしのほうがあ

なたに祈願し、あなたのこだまを解釈することを学ばねばならないから。

(わたしがさようならと言えなかったとしたら、さようならはわたしたちの間には存在しないからだ)

あなたはすこしころもとないようすで近づく、誰かの手のなかで一度は窓に寄せられ、その後引かれる燭台のように、

というのも無限の丸天井でもっとずっと広大な青い空間を照らさなければならぬからだ。

あるいはわたしが手を貸す必要があるだろうか？ 名誉のしわがれた囁きはあなたの歩みをもつれさせはしないか？

顔の下半分を覆うシヨールを渡してほしいと願うかもしれない、あなたはそんなにか弱く、類縁のないひとびとに呼ばれて行くことにこんなにも疲れ果てていた。

引きこもってあなたのためになにかを願うことができる教会があったならいいのに、この世界にひとつでも！

誰に頼む？ 誰に言おうか？

「急かさないでやってください、こんなに苦しんできたんです、だからわたしたちを見つめずに死のうちに生きることができないんです」

わたしはひとりでいられるような山を、岸边を、人里離れた礼拝堂を探さなくてはならない、

広大無辺な夜の法悦に立ちつくし、  
巡回する警備員を警戒して鉄条網にひとり対峙し、

もの言わぬ動物たちに舐められ、子供たちの夢にまわりつかれて星ぼしのあいだに行く荷車を、天空のように幅広い、あなたを導く掌が見える場所を。

そして泣く、ただひたすらに泣く、あなたがティンパニのあいだの炎のほとばしりのように海に消えていくのを見る、

だがあなたは去っていない、  
大地の抑えた呼吸のようにつづけていると感じる、泣きそして年月

が過ぎて  
涙にくれる顔からひとつのきらめきが出るのを待つ、

ある日わたしの娘が草をかきわけやってきて目眩がするようなザクロを、燃える鳩を、大地の奥底から再生する

謎の夢を見せるのを！

(カナダ、オタワ、一九四四年七月)